

白山ふるさと文学賞

第三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 最優秀賞

祖父と祖母の姿

松任中学校三年

岡田 おかだ

空美 あお

私の祖父は元消防士で、祖母はパン屋さんに勤めています。そして、その一生懸命に働いたお金で洋服を買ってくれたり、ごはんを食べに連れていってくれる、とても優しい祖父と祖母です。

夏休みに入る前のある日、祖父と祖母は私の家で育てている野菜の様子を見に来ていました。そして二人が野菜に肥料をあげたりしているところに私もまぎって野菜に水をあげたりして手伝っている最中でした。突然、とても大きな犬の鳴き声が出て驚いて鳴き声を見た方を見てみると、近所のおばさんと老夫婦と一緒に散歩をしていたようでした。でもいつもと様子が違って、老夫婦のおばさんの方の手から血が出ていました。それに気がついた私と祖父と祖母は、急いでかけよって祖父と祖母は手当て、そして私は、もともと心臓が悪くて鳴き声とかまれた手に驚き軽い発作をおこしているおばさんに、祖父にたのまれたとおりのいすをもつてきて座ってもらいました。

私はいきなりの出来事に慌てながらも、祖父の手当ての手さばきや的確な指示に元消防士の一面が垣間見えて感激していました。今までに祖父の勤めている消防署に祖父に会いに行ったことはあったけど、実際に仕事をしているところは見たことがなかったので、それを初めて目の当たりにしていつもの私に優しくしゃべりかけてくる祖父と同じ人物とは思えなかったです。それくらいギャップがあつて本当に驚きました。そして祖母もまた、いつも一生懸命パンをこねたり、そつと私の頭をなでしてくれる力強くも優しくあたたかい手で、発作をおこして苦しそうなおばあさんの手をにぎって、「大丈夫ですよ」とはげましています。

そしてそのただならぬ空気を感じとったのか近所の人たちがわらわらと出てきました。そしてその中の一人のひとが救急車を呼んでくれました。その頃には手当ても終わっていて、おばあさんも少し落ち着いたよう、あとは救急車を待つだけという状況でした。すると近所の人たちは事情を聞いてさつき祖母がしていたようにおばあさんをはげまはじめました。私は、「あとからきたくせに」と思っていたけど、祖父た

ちはまったく気づかないうちに野菜の世話に戻っていました。私はその姿を見てさらに驚きました。その「私たちはなにもしていませんよ」という謙虚な姿勢は、私にはどんな危機からも救ってくれるのに、決して顔を見せようとしないヒーローのように思えました。そしてそう思ったとたんに、自分の思っていたことが恥ずかしくなつて、私もその数十分前と同じその光景の中に入って、作業をはじめました。それから救急車が来て、おばあさんが運ばれていって、そんなこと絶対しないけど、もしおばあさんが飼い主のおばさんを訴えると事件になるからと言って、警察の人が来て、一連の出来事全てを話せる私が事情聴取を受けたりして、その出来事はなかったかのように終わりました。

次の日の夕食の後、私たち家族は全員分より少し多い量のケーキを食べました。飼い主のおばさんが、私と祖父と祖母の三人に、「とてもお世話になつたから」と言って持つてきてくれたんです。そして私はおばさんが家に来てくれたとき家にいなくて受けとれなかったけど、母に話を聞いてとてもうれしい気持ちになりました。

この出来事は私にたくさんのことを教えてくれました。まず、祖父の元消防士のかっこいい一面、祖父と祖母の謙虚な姿勢、飼い主のおばさんの感謝の心の三つです。これらはきつと私が定年を過ぎてからも覚えていると思えるくらい大きく心に残りました。でも私は、心に残つた祖父たちの姿をそのまま「すごい」と思うだけではなく、私もそんな姿をだれかに見せられないときつと意味はないし、その方が祖父たちも喜ぶと思うので、そうなれるように謙虚な姿勢と感謝の気持ちを心がけていきたいと思えます。